## (1) 哺 乳 類

**【概要】**

埼玉県産の哺乳類は、絶滅種のニホンオオカミとニホンカワウソ、外来帰化種のヌートリアとマスクラット、アライグマを含め57種であり、全国で記録のある165種（環境省2002）の約34％となっている。

これらの哺乳類の分布傾向をみると、中大型哺乳類は秩父山地に生息しているものが多い。かつては秩父山地にはニホンオオカミが生息していたが、狩猟によってシカやイノシシ等の数が減少し、これらを主要な餌としていたオオカミ自体の数が減少したことに加え、日本が島国であったために他地域からの種の供給を受けることができないままに日本のオオカミは絶滅の道をたどっていったものと考えられている。現在、秩父山地では、狩猟圧が減少したこととすでに天敵のオオカミが絶滅していることから、逆にシカの個体数が増え過ぎる傾向が続いており、これらの採餌による森林の下層植生に対する悪影響が顕在化してきている。

一方、低湿地の広がっていた平野部においてはニホンカワウソが生息していたが、これらの毛皮が高く売れたことから捕獲が続けられ個体数が減少したことに加え、河川環境の悪化によって他の生息域からの種の供給が断たれていったことが絶滅につながったものと考えられている。また、かつては県内平野部においてもキツネやタヌキ等の中型哺乳類が広く分布していたことが確認されているが、これらについても狩猟圧とその生息環境の喪失によってその数が減少していったものと考えられ、現在これらの種が低地で見られるのは、河川敷を中心としてその周辺に限られてきている。しかしながら、最近、県南部の河川敷やその周辺でキツネやタヌキの生息確認例がいくつか報告され、その動向が注目される。

小型哺乳類については、台地・丘陵帯から秩父山地に生息するものが多く、県内平野部において生息するものは、農耕地周辺で見られるホンシュウジネズミ、ホンドハタネズミ、ホンドカヤネズミ等のほかに、住家性のニホンクマネズミ、ニホンドブネズミ等となっている。ホンシュウジネズミやホンドアカネズミの主要な生息場所は、腐植層の発達した雑木林である。しかしながら、従来から薪炭林としての利用がなされていたことから柴刈りや落葉掻きが行われており、腐植層の発達がままならないことから土壌動物の生産が少なく、ジネズミ等の食虫類やアカネズミにとっては決して生息しやすい環境とは言えなかった。さらに、近年は薪炭林としての利用も減少し、開発による雑木林自体の喪失がこれらの種の生息にとっての脅威となっている。

一方、近年の在来種及び外来種による地域の自然生態系への影響が、懸念されている。例えば、上記したニホンジカの増加による在来植物種への食害の問題や外来種であるアライグマの分布拡大による在来動物種への捕食圧や競合による影響は、今後の希少野生動植物への脅威となる可能性が高まっている。

なお2002年版までレッドリストに掲載されていたニホンイノシシについては増加傾向にあることから今回のレッドリストからは除外した。

（埼玉県におけるコウモリの現状について）

現在、日本産コウモリとして約50種（亜種を除く）が数えられる。

埼玉県では、埼玉県動物誌（鈴木, 1978）が今までに記録された16種を挙げているが、町田（1990）は分類の変更や新記録種の追加をもとに、新たに16種を示した。埼玉県は研究者の努力により、哺乳類相が比較的良く知られている地域である。しかし、コウモリ類については、日本産小コウモリ類の約半数が記録されているにもかかわらず、不明の点が多い。これは、日本全体についても言えることであり、調査の難しさによる部分が大きいと考えられる。また、洞窟を主なねぐらとする種を除く大半の種が生息する森林の荒廃も影響を与えていよう。青森県や北海道、岩手県など森林環境が良好な地域で、しかも調査が比較的行き届いた地域でも、15～16種の種組成であり、その点においては豊富な種組成を持つ地域と言えるが、発見個体数が少ないのも特徴である。これは偶然の発見例が多いためと考えられる。

埼玉県では、住家性のアブラコウモリ以外、積極的な調査で得られた知見は少ない。

このような中で、希少コウモリ類にかかわる問題点をまとめると次のとおりである。

1．ねぐらの減少

前述したように、多くの種が洞窟あるいは樹洞を主なねぐらとしているが、冬眠期に人家に入る種もあり、ヒナコウモリの多くはこのような場所で発見されている。しかし、活動期におけるねぐらの減少は個体の集中を促すと同時に、競争をも引き起こし、結果としてねぐら環境の悪化が個体群の崩壊を引き起こす可能性を持っている。

また、ヤマコウモリなどは市街地の社寺林の大木で記録がみられたが、近年そのような例をあまり聞かない。大木の減少は、森林内ばかりでなく、社寺林などにも著しい。町田（未発表）は熊谷市でヤマコウモリの観察を行っているが、生息地と採餌場所（主に荒川と推定）の間に高層ビルが多く建ち、生息環境を圧迫している現状がある。今後はねぐら環境の保全・保護を考慮しなければならない。

2．生存に対する脅威

特に、秩父市（旧大滝村）仏石山鍾乳洞、同神庭鍾乳洞には洞窟に生息するキクガシラコウモリ、コキクガシラコウモリ、ウサギコウモリがよく見られる。また、この２ヶ所はチチブコウモリの冬眠が過去に確認されている。さらに、ヒナコウモリが冬眠する場所として日本全国で唯一知られている。しかし両鍾乳洞とも半洞窟状の部分がオーバーハングと垂直の岩盤を提供し、ロッククライマーの格好のゲレンデとなっている。

ヒナコウモリ及びチチブコウモリは両鍾乳洞の壁面で冬眠が発見されており、現在もヒナコウモリは同じ場所で冬眠を行っている。今後クライマーによる壁面の損壊、ハンマーによる振動、音など、冬眠をかく乱するような行為が続くことを考えると、我が国で唯一の冬眠場所が失われる可能性は非常に大きい。

今後、早急な保護対策が望まれる。

〔モグラ目　トガリネズミ科〕　**全県カテゴリー** 準絶滅危惧　**全国カテゴリー** 準絶滅危惧

〔和名〕 **アズミトガリネズミ**　〔学名〕 *Sorex hosonoi hosonoi*

**【摘要】** 本州中部の白山、北・中央・南アルプス、奥秩父、志賀山等、高山の低木林から亜高山の針広混交林に局地的に生息するトガリネズミ類。日本固有亜種。

**【形態の記載】** 頭胴長50～66mm、尾長48～51mm程度の中型のトガリネズミ。背面は暗褐色で腹面はやや淡色。ホンシュウトガリネズミに似るが、やや小型で尾が長い。

**【分布の概要】** 県内において奥秩父の亜高山帯に少数が生息すると考えられる。秩父市（旧大滝村）での確認記録がある。

**【その他】** 詳しい生態は不明。

〔モグラ目　トガリネズミ科〕　**全県カテゴリー** 地帯別危惧　**全国カテゴリー** －

〔和名〕 **ホンシュウジネズミ**　〔学名〕 *Crocidura dsinezumi chisai*

**【摘要】** 北海道、本州に分布し、日本に生息するジネズミ類の中では大型の種。

**【形態の記載】** 頭胴長61～84mm、尾長39～54mm程度。毛色は変異に富み、背面は暗赤褐色又は暗褐色で、腹面は淡色又は淡灰褐色。尾には全面をおおう短毛の他、基半部にまばらな長毛がある。

**【分布の概要】** 県内では、低山帯から山地帯に広く分布するが、低地帯での生息確認例は少なくなっている。

**【その他】** 河畔、水辺、林縁のヤブ、低山帯の低木林等に生息し、小型昆虫やクモ類を捕食するが、近年、低地帯ではこうした餌の多い良好な自然環境が失われつつある。

〔モグラ目　トガリネズミ科〕　**全県カテゴリー** 地帯別危惧　**全国カテゴリー** 絶滅のおそれのある地域個体群

〔和名〕 **ニホンカワネズミ**　〔学名〕 *Chimarrogale himalayica platycephala*

**【摘要】** 北海道と沖縄を除く日本全国の低山から標高2,000mまでの山間の渓流に生息する大型の食虫類。かつては各地の水域に普通に生息していたと考えられるが、現在は生息状況が悪化している。同一種は東南アジアに広く分布する。

**【形態の記載】** 頭胴長95～133mm、尾長90～124mm程度。毛色は背面は黒味を帯びた灰色又は黒褐色。腹面はやや黄色を帯びた灰色又は淡褐色。尾が長く手足の指の両側に水かきとなる剛毛がある。耳介は毛衣にかくされ、目は皮下にうずまり極めて小さい。

**【分布の概要】** 県内では台地・丘陵帯から山地帯の水流域に生息し、かつては秩父盆地や長瀞付近の荒川本流でも確認されていたが、近年は山間部の渓流域のみに分布が限定されつつあり、低山帯での確認事例が少なくなっている。

**【生息状況】** 秩父市等の周辺部にある台地・丘陵帯の細流では、かつて本種が普通に生息していたようであるが、現在はほとんど確認されず、さらに上流にある山間渓流部でないと見られない。外秩父に連なる台地・丘陵帯の流水域でも確実な生息地はほとんどない。

**【生態的特性】** 主に河川を泳ぎながら水中や水辺で魚類、カエル、水生昆虫等の小動物を捕食する。日中も活動するが夜間はより活発に活動する。河畔の土中や石の下に営巣する。

**【生息地の条件】** 水がきれいで、隠れ家となる岸辺があり、植生が良好な渓流河川を好むとされる。

**【生存に対する脅威】** 水質の悪化、人為的な河川の分断、河川改修などが考えられる。

〔モグラ目　モグラ科〕　**全県カテゴリー** 地帯別危惧　**全国カテゴリー** －

〔和名〕 **ホンシュウヒミズ**　〔学名〕 *Urotrichus talpoides hondonis*

**【摘要】** 本州の平地～山地に広く分布する小型のモグラ。日本固有亜種。

**【形態の記載】** 頭胴長89～104mm、尾長27～38mm程度。耳介を欠き、黒色から黒褐色でビロード状の体を持つ。こん棒状の尾には、長毛がまばらに生える。ヒメヒミズよりも大型で、尾が太く短い。

**【分布の概要】** 県内では、低地帯～山地帯までの森林を中心として広範囲に分布する。低地帯での確認記録は少なく、減少傾向にあると考えられる。

**【その他】** 通常、よく茂った樹林地の林床に多く、落葉・腐植層で半地下性の生活をする。ブッシュで礫が多く、下草の茂ったところを好む。低地帯では、こうした良好な森林環境が喪失しつつある。

〔モグラ目　モグラ科〕　**全県カテゴリー** 準絶滅危惧　**全国カテゴリー** 準絶滅危惧

〔和名〕 **フジミズラモグラ**　〔学名〕 *Euroscaptor mizura mizura*

**【摘要】** 広島県、富士山、埼玉県雲取山、栃木県日光、岩手県五葉山等で記録されている小型のモグラ。日本固有亜種。中部地方以北の亜高山帯から高山帯に別亜種のシナノミズラモグラ(*E. m. ohtai*)が生息する。

**【形態の記載】** 頭胴長80～106mm、尾長20～26mm程度。毛色は灰褐色から黒色。ヒミズよりやや大きく、耳介がない。別亜種のシナノミズラモグラよりも大きい。

**【分布の概要】** 県内では1963年に奥秩父白岩山で初めて発見されて以来、低山帯から亜高山帯にかけて少数の確認記録があるが、分布は局地的であり元来生息数は多くないと考えられる。

**【その他】** 低山帯～亜高山帯の森林に生息し、昆虫類、ミミズ類等を捕食する。秩父市（旧秩父市、荒川村、大滝村白岩山・雲取山）、横瀬町・飯能市（旧名栗村）の大持山等で記録がある。

〔コウモリ目　キクガシラコウモリ科〕　**全県カテゴリー** 準絶滅危惧　**全国カテゴリー** －

〔和名〕 **ニホンコキクガシラコウモリ**　〔学名〕 *Rhinolophus cornutus cornutus*

**【摘要】** 北海道、本州、四国、九州、佐渡、伊豆七島、対馬、壱岐、屋久島、徳之島、沖永良部島等に分布する。キクガシラコウモリに似るが、小型。主に洞窟性。

**【形態の記載】** キクガシラコウモリに似るがより小型。前腕長40mm。

**【分布の概要】** 秩父市（旧大滝村）仏石山鍾乳洞、同神庭鍾乳洞、長瀞町法善寺裏洞窟、皆野町水潜寺鍾乳洞、秩父市橋立鍾乳洞、飯能市（旧名栗村）で記録がある。

**【その他】** キクガシラコウモリ同様、洞窟に生息する。洞窟の変化及び周辺の開発等で、ねぐらや採餌場所が悪化・減少すると見られなくなる。

〔コウモリ目　キクガシラコウモリ科〕　**全県カテゴリー** 準絶滅危惧　**全国カテゴリー** －

〔和名〕 **ニホンキクガシラコウモリ**　〔学名〕 *Rhinolophus ferrumequinum nippon*

**【摘要】** 北海道、本州、四国、九州、佐渡、対馬、五島列島、屋久島に分布する。主に洞窟にすむ。

**【形態の記載】** 前腕長60mm。鼻に鼻葉という突起を持つ。

**【その他】** 洞窟にすみ、冬眠も洞窟で行う。秩父地方を中心に生息するが、少ない。洞窟の変化及び周辺の開発とで、採餌場所が減少すると見られなくなる。

〔コウモリ目　ヒナコウモリ科〕　**全県カテゴリー** 絶滅危惧ⅠB類　**全国カテゴリー** 絶滅危惧Ⅱ類

〔和名〕 **シナノホオヒゲコウモリ**　〔学名〕 *Myotis ikonnikovi hosonoi*

**【摘要】** 中国地方を除く本州に分布する。

**【形態の記載】** 頬にヒゲを有する。

**【分布の概要】** 秩父市（旧秩父市、大滝村十文字峠）で記録がある。

**【その他】** Yoshiyuki（1988）は従来、本州で知られている本種の内、長野県内で知られているものを本種とし、他をフジホオヒゲコウモリとしている。ここでは従来通りシナノホオヒゲコウモリとして記録する。

〔コウモリ目　ヒナコウモリ科〕　**全県カテゴリー** 絶滅危惧Ⅱ類　**全国カテゴリー** －

〔和名〕 **カグヤコウモリ**　〔学名〕 *Myotis frater kaguyae*

**【摘要】** 東北、北海道の比較的成熟度の高い良好な森林によく見られる。

**【形態の記載】** 前腕長35～40mm。中型のホオヒゲコウモリ類。腿間膜が広く尾が長い。

**【分布の概要】** 秩父市（旧大滝村）川又で確認記録がある。

**【その他】** 洞窟にも入る。本県での記録は１例しかなく、県内の生息状況はよく分っていない。

〔コウモリ目　ヒナコウモリ科〕　**全県カテゴリー** 準絶滅危惧　**全国カテゴリー** －

〔和名〕 **モモジロコウモリ**　〔学名〕 *Myotis macrodactylus*

**【摘要】** 北海道、本州、四国、九州、佐渡、対馬に分布する。主に洞窟にすむ。特に下を水が流れるような洞窟を好む。

**【形態の記載】** 前腕長35～40mm。後足が大きい。

**【分布の概要】** 長瀞町、秩父市（旧大滝村）で確認記録がある。

**【その他】** 川の上を主な採餌場所にしている。

〔コウモリ目　ヒナコウモリ科〕　**全県カテゴリー**　絶滅危惧ＩＢ類　**全国カテゴリー**　絶滅危惧ＩＢ類

〔和名〕 **モリアブラコウモリ**　〔学名〕 *Pipistrellus endoi*

**【摘要】** 中国地方を除く本州と四国から知られるが分布は局所的。日本固有種。

**【形態の記載】** 住家性のアブラコウモリによく似るが、より小型。色も焦げ茶色が強い。

**【分布の概要】** 秩父市（旧大滝村）白岩山、小鹿野町長若、同三田川で記録がある。

**【その他】** 本種は森林内のみで発見されており、主に樹洞をねぐらとしている。成熟度の高い良好な森林が生息の条件となっている。本種が新種として報告された当時、秩父地方でも確認されているが、その後の発見例は知られてない。森林の減少によるものかは不明。

〔コウモリ目　ヒナコウモリ科〕　**全県カテゴリー**　絶滅危惧Ⅱ類　**全国カテゴリー**　準絶滅危惧

〔和名〕 **ヤマコウモリ**　〔学名〕 *Nyctalus aviator*

**【摘要】** かつては北海道、本州、四国、九州、対馬から記録があったが、近年個体数が激減している、代表的な樹洞性コウモリ。

**【形態の記載】** 前腕長60mm前後。翼開長40cmほどの大型のコウモリである。

**【分布の概要】** 秩父市宮側町、深谷市（旧川本町）、熊谷市、北本市で記録がある。

**【その他】** 大型のコウモリであり、開けた空間と大量の餌を供給してくれる採餌場所が必要である。今までの発見例は、主に神社などにある大木の樹洞内からである。ねぐらとなる大木の樹洞が減少しており、生息が難しい状況である。

〔コウモリ目　ヒナコウモリ科〕　**全県カテゴリー**　絶滅危惧ＩＢ類　**全国カテゴリー**　絶滅危惧ＩＢ類

〔和名〕 **クビワコウモリ**　〔学名〕 *Eptesicus japonensis*

**【摘要】** 北アルプス・富士山麓と秩父山系からわずかに知られる日本固有種。近年、乗鞍高原で繁殖集団が発見された。

**【形態の記載】** 中型のコウモリで、首の部分の黄褐色の毛が首輪模様を形作る。

**【分布の概要】** 秩父市（旧大滝村）中津川、同十文字峠。

**【その他】** 十文字峠では夏季、原生林内を飛翔中に捕獲されたものである。捕獲された状況から、生息には豊かな自然林が必要であると考えられる。

〔コウモリ目　ヒナコウモリ科〕　**全県カテゴリー**　絶滅危惧Ⅱ類　**全国カテゴリー**　－

〔和名〕 **ヒナコウモリ**　〔学名〕 *Vespertilio superans*

**【摘要】** 北海道、中国地方を除く本州、九州から記録があるが、確認された繁殖地は少ない。

**【形態の記載】** 中型のコウモリ。霜降り状の毛並みが美しいコウモリである。

**【分布の概要】** 皆野町、秩父市影森、秩父市（旧荒川村）、同市（旧大滝村）大輪神庭鍾乳洞、同三峰神社、同仏石山鍾乳洞、同十文字峠で記録がある。

**【その他】** ♀が大繁殖集団を作るので知られている。活動中の記録は三峰神社、十文字峠のものである。本種の夏季の活動については情報が少ない。ほとんど人家内、洞窟内の冬眠例である。夏季の活動場所は主に森林内と考えられている。豊かな森林が確保されないと生息は難しい。秩父市（旧大滝村）仏石山鍾乳洞、同神庭鍾乳洞の生息地は日本で唯一冬眠場所として知られている。しかし、現在ロッククライマーのゲレンデとされており、ハーケンやボルト類が生息地の岩場にたくさん打ち込まれており、生息の危機に瀕している。

〔コウモリ目　ヒナコウモリ科〕　**全県カテゴリー**　絶滅危惧Ⅱ類　**全国カテゴリー**　絶滅のおそれのある地域個体群

〔和名〕 **チチブコウモリ**　〔学名〕 *Barbastella leucomelas darjelingensis*

**【摘要】** 東北、北海道でも生息している。

**【形態の記載】** 耳の付け根が合一しており、三角形の特徴的な耳の形をもつ中型のコウモリ。毛色が黒く、黄褐色の毛が混じる。

**【分布の概要】** 秩父市寺尾、秩父市（旧大滝村）大輪神庭鍾乳洞、同仏石山鍾乳洞。

**【その他】** 1889年に秩父で初めて発見されたのでこの和名が付けられた。発見例はすべて冬眠中のものである。東北、北海道の例では豊かな森林内で活動することが知られている。ヒナコウモリに同じく、冬眠場所がロッククライマーによって破壊される危険性が非常に高い。

〔コウモリ目　ヒナコウモリ科〕　**全県カテゴリー** 絶滅危惧Ⅱ類　**全国カテゴリー** －

〔和名〕 **ニホンウサギコウモリ**　〔学名〕 *Plecotus auritus sacrimontis*

**【摘要】** 北海道、中国地方を除く本州、四国から知られるが、この25年間では北海道、東北を除くと尾瀬、富士山、南北アルプス山麓、白山、奈良県、剣山、石槌山から知られるのみ。

**【形態の記載】** 耳が40mmほどあり、非常に長い。

**【分布の概要】** 秩父市（旧大滝村）赤沢岳十文字鍾乳洞、同仏石山鍾乳洞、同神庭鍾乳洞、皆野町水潜寺鍾乳洞、秩父市橋立鍾乳洞、同浦山山城山マンガン洞、東秩父村、皆野町、秩父市（旧吉田町）。

**【その他】** 主に洞窟に生息する。秩父地方では単独で見ることが多い。

〔コウモリ目　ヒナコウモリ科〕　**全県カテゴリー** 絶滅　**全国カテゴリー** －

〔和名〕 **ニホンユビナガコウモリ**　〔学名〕 *Miniopterus schreibersi fuliginosus*

**【摘要】** 本州、四国、九州、佐渡、対馬から知られる。日本では主に海岸線の海食洞に大群ですむ。

**【形態の記載】** 前腕長45～51mm。体色は焦げ茶色で、狭くて長い翼を持つ。

**【分布の概要】** 秩父地方で採集された記録があるが、詳細の場所は不明である。

**【その他】** 明治年間に波江元吉が秩父の記録を挙げているが、その後記録は皆無である。

〔コウモリ目　ヒナコウモリ科〕　**全県カテゴリー** 絶滅危惧Ⅱ類　**全国カテゴリー** －

〔和名〕 **ニホンコテングコウモリ**　〔学名〕 *Murina ussuriensis silvatica*

**【摘要】** 北海道、本州、四国、九州、対馬、壱岐から知られる。東北、北海道などの亜高山性針葉樹、山地性広葉樹に普通。本種もニホンテングコウモリと同様、適応力は高いと考えられ、広い範囲に分布している。

**【形態の記載】** ニホンテングコウモリを小型化した体型をしている。前腕長30mm前後。毛色が黄褐色で、ニホンテングコウモリと異なる。鼻が突き出ているのは同じ。

**【分布の概要】** 秩父市別所、浦山、秩父市（旧大滝村）大ガマタ沢、白岩山。

**【その他】** 本県では発見例が少ない。二次林でも生活できる適応力をもつと考えられるが、森林の伐採は生息地を確実に減らすものと考えられる。

〔コウモリ目　ヒナコウモリ科〕　**全県カテゴリー** 絶滅危惧Ⅱ類　**全国カテゴリー** 絶滅危惧Ⅱ類

〔和名〕 **テングコウモリ**　〔学名〕 *Murina hilgendorfi*

**【摘要】** 北海道、本州、四国から知られる。主なねぐらは樹洞と考えられるが、洞窟内にも入る。

**【形態の記載】** 中型のコウモリで、銀白色をした毛と突き出した鼻が特徴的である。前腕長40mm前後。

**【分布の概要】** 東秩父村、皆野町日野沢、秩父市影森、秩父市田村、秩父市（旧大滝村）十文字峠、小川町で記録がある。

**【その他】** 比較的に適応力が高いと考えられ、二次林の雑木林から亜高山帯の原生林内まで生息しているが、森林に依存している部分が大きいと考えられ、近年秩父市付近での生息例を聞かない。

〔サル目　オナガザル科〕　**全県カテゴリー** 地帯別危惧　**全国カテゴリー** 絶滅のおそれのある地域個体群

〔和名〕 **ホンドザル**　〔学名〕 *Macaca fuscata fuscata*

**【摘要】** 本州・四国に分布する。屋久島に別亜種ヤクシマザル(*M. f. yakui*)が生息する。下北半島及び東北地方の個体群は保護に留意すべき個体群とされている。

**【形態の記載】** 毛色は茶褐色ないし灰褐色で、腹と手足の内側はやや白い。顔と尻は裸出して赤い。♂は♀よりも大型になる。下北半島、神奈川県西部、伊豆大島で野生化しているタイワンザル(*M. cyclopis*)は本種に比べ尾がはるかに長い。

**【分布の概要】** 県内では秩父地方に生息し、秩父市（旧秩父市、大滝村、荒川村）、横瀬町、小鹿野町（旧両神村）、飯能市（旧名栗村）、ときがわ町（旧都幾川村）等で記録がある。かつては低標高地でも生息していたと考えられるが、現在安定した生息個体群が見られるのは低山帯～山地帯である。

**【生態的特性】** 落葉広葉樹林で木の葉、花、果実、樹皮、冬芽、昆虫類等を食べる雑食性。群れで生活し、餌の分布に応じて季節的に群れで移動する。

**【生息地の条件】** 植林地は餌場としてほとんど利用しないため、餌場となる落葉広葉樹林が必要。

**【生存に対する脅威】** 森林伐採、石灰岩採掘等による生息地の分断及び縮小。

〔ウサギ目　ウサギ科〕　**全県カテゴリー**　地帯別危惧　**全国カテゴリー**　－

〔和名〕 **キュウシュウノウサギ**　〔学名〕 *Lepus brachyurus brachyurus*

**【摘要】** 本州太平洋側、四国、九州に分布する。

**【形態の記載】** 普通夏冬とも体毛は茶色である。頭胴長は50cm程度、尾は４cm程度。耳は７～８cm。

**【分布の概要】** 奥秩父の亜高山帯から県南部の荒川河川敷まで生息するが、近年、荒川下流域の河川敷では絶滅が心配されている。

**【生息状況】** 県内では、台地・丘陵帯以上の地域に普通であるが、個体数は減少傾向にあると推測される。

**【生態的特性】** ４亜種に分けられているが特に冬に体毛が白化するトウホクノウサギとの分布の境界は不明瞭であり、今後の研究が待たれる。

**【生息地の条件】** ヨーロッパアナウサギ（飼いウサギ）と異なり、巣穴を掘らないため、林とそれに接する草地を主な生息地とする。このため、林の伐採や草地のかく乱などの影響を受けやすいと考えられる。

**【生存に対する脅威】** 雑木林などの開発。

**【特記事項】** 荒川下流に作られた荒川第一調節池（彩湖）では調査開始時に生息する本種を確認できたが、完成時には生息を確認することはできなかった。秋ヶ瀬公園内には現在も生息すると推測されるが、野犬の群れをみることがあり、野犬によるノウサギへの脅威は大きいと考えられる。その他の地域においても、野犬（野ネコも含め）は野生動物に大きな影響を与えていると考えられる。

〔ネズミ目　リス科〕　**全県カテゴリー**　地帯別危惧　**全国カテゴリー**　絶滅のおそれのある地域個体群

〔和名〕 **ニホンリス**　〔学名〕 *Sciurus lis*

**【摘要】** 本州、四国、九州に分布するとされているが、近年の九州での確実な生息記録はない。本州中部以北に多い。

**【形態の記載】** 移入されたタイワンリスが、神奈川県や東京都において野生化している。ニホンリスはタイワンリスより小型で足が長いこと、また冬には耳の先に長い毛があること、腹部は、背面と異なり白いこと等で区別できる。

**【分布の概要】** 県内の台地・丘陵帯以上の森林に生息する。台地・丘陵帯では加治丘陵、高麗丘陵、岩殿丘陵等では極く少数の生息が認められる。狭山丘陵には分布しないとされていたが、近年リス類の目撃記録がある。自然分布のニホンリスである可能性は低いが、実態は不明。武蔵野台地上の平地林にもかつては生息していたと考えられるが、現在は全く見られず絶滅は間違いない。

**【生息状況】** 秩父地方のほぼ全域に生息しているが、その中の秩父市周辺の丘陵部では、個体数が減少傾向にあり、将来的に生息地が分断される可能性がある。加治、高麗、岩殿の各丘陵でも同様で、台地・丘陵帯から低山帯にかけて減少傾向が続いている。

**【生態的特性】** 本種は、ドングリ、クルミなどの堅果やマツの実などの種子、液果、若葉、つぼみなど植物質を主食とするが、昆虫や鳥の卵等も食べる。営巣は、樹上に木の皮や小枝を集めて球形の巣をつくることが多い。

**【生息地の条件】** まとまりを持った広域の広葉樹林や針葉樹林に生息する。

**【生存に対する脅威】** 森林を伝って移動するので、森林の伐採により、生息地の分断化が進み生息数の減少につながると考えられる。

〔ネズミ目　リス科〕　**全県カテゴリー**　準絶滅危惧　**全国カテゴリー**　－

〔和名〕 **ホンドモモンガ**　〔学名〕 *Pteromys momonga*

**【摘要】** 本州と九州に分布するが、四国や佐渡、南西諸島にはいない。

**【形態の記載】** 前足と後足の間に飛膜があって、それを拡げて滑空する。大きな目をしている。

**【分布の概要】** 現在は県内の低山帯以上の森林で少数の生息が見られる。

**【生息状況】** かつて、比企、児玉の低山及び丘陵地でも分布記録があるが、近年における台地・丘陵帯の生息情報は全くなく、すでに絶滅したと考えられる。低山帯～亜高山帯にかけても生息密度は低く確認記録は少ない。

**【生態的特性】** 晩鳥（ばんどり）と呼ばれるように、完全な夜行性で、よく茂った広葉樹林の樹上の穴を利用し営巣する。

**【生息地の条件】** 大木のある森林地帯。

**【生存に対する脅威】** 森林の伐採に伴う、生息地の分断化、小規模化の進行。巣となる樹洞を持った大木の減少。

〔ネズミ目　リス科〕　**全県カテゴリー** 地帯別危惧　**全国カテゴリー** －

〔和名〕 **ニッコウムササビ**　〔学名〕 *Petaurista leucogenys nikkonis*

**【摘要】**本州、四国、九州に分布するが、島には生息していない。

**【形態の記載】**前足と後足の間に飛膜があって、それを拡げて滑空する。ホンドモモンガに比べ決定的に大きい。

**【分布の概要】**県内では主に台地・丘陵帯から亜高山帯にかけての森林に生息する。丘陵地の辺縁部ではかつて生息地が連続的に見られたが、大木の減少等の要因により、現在、生息地の分断・消滅が顕著になっている。

**【生息状況】**秩父地方では、秩父市街地や周辺にはあまり生息していないが、山間部での生息数は少なくない。台地・丘陵帯では、そのほとんどが神社の林に生息しており、局地的な分布になりつつある。低山に連なる高麗丘陵や加治丘陵では少数の生息が認められるが、独立丘陵の狭山丘陵には、現在全く見られない。

**【生態的特性】**ホンドモモンガと同様に晩鳥（ばんどり）と呼ばれることがあり、夜行性で、昼間は人家や神社の軒下、天井、戸袋、木のうろ等につくった巣にいる。

**【生息地の条件】**現在、台地・丘陵帯では、そのほとんどが大きなスギと古びた神殿のある神社の森に依存している。

**【生存に対する脅威】**台地・丘陵帯においては、神社の大木及び周辺の採餌地となる森林の伐採により、その生息が困難になっている。

〔ネズミ目　ヤマネ科〕　**全県カテゴリー** 準絶滅危惧　**全国カテゴリー** 準絶滅危惧

〔和名〕 **ヤマネ**　〔学名〕 *Glirulus japonicus*

**【摘要】**本州、九州、四国の山地の森林に生息する、１科１属１種の日本固有種。

**【形態の記載】**一見ネズミに似るが、尾には毛が生え、体つきが丸く、足が短い。背に黒い帯状の線がある。

**【分布の概要】**県内の低山帯以上から亜高山帯の森林に分布する山地性の種。秩父市（旧秩父市、大滝村、荒川村）、両神山等で記録があるが、生息密度は低いと考えられ、確認記録は少ない。

**【その他】**リスに似た丸い巣を作ることもあるが、普通は木のうろや巣箱を利用する。夜行性で昆虫類や木の実等を食べる。半年近く冬眠する。国の天然記念物。

〔ネズミ目　ネズミ科〕　**全県カテゴリー** 地帯別危惧　**全国カテゴリー** －

〔和名〕 **ホンドアカネズミ**　〔学名〕 *Apodemus speciosus speciosus*

**【摘要】**本州、四国、九州、壱岐、五島列島に分布する。各地の低地から山地にかけて生息している。

**【形態の記載】**体背面は赤褐色で腹部は白色。体の側面は明るくオレンジ色を帯びる。近似種のホンドヒメネズミはホンドアカネズミより小型で細身。頭胴長は約12cmで、尾は頭胴長よりやや短い。

**【分布の概要】**県内では低地帯から亜高山帯まで広く分布し、ノネズミ類では最も普遍的な種である。しかしながら、低地帯では市街化や農耕地の人工化に伴い生息地である草地や樹林地の喪失や分断化が進み生息数が減っている。都市化や人工化が進んでいる中川・加須低地では、市街地内の屋敷林に依存して少数の生息が認められる。

〔ネズミ目　ネズミ科〕　**全県カテゴリー** 地帯別危惧　**全国カテゴリー** －

〔和名〕 **ホンドヒメネズミ**　〔学名〕 *Apodemus argenteus argenteus*

**【摘要】**本州、四国、九州、佐渡に分布する。ホンドアカネズミについで日本に広く分布している種である。

**【形態の記載】**体色は赤褐色で金色の光沢があり、腹部は白色。頭胴長は約９cmで、尾は頭胴長より長めである。

**【分布の概要】**県内では台地・丘陵帯以上の森林域に広く分布するが、低地帯での確認例はない。台地・丘陵帯では寄居町、本庄市（旧児玉町）、ときがわ町（旧玉川村）、毛呂山町、嵐山町等で生息記録があるが、高麗丘陵、加治丘陵、狭山丘陵等の森林地帯でも生息数は非常に少ない。

**【その他】**主として樹上性のネズミで、ホンドアカネズミより森林への依存度が高い。

〔ネズミ目　ネズミ科〕　**全県カテゴリー** 準絶滅危惧　**全国カテゴリー** －

〔和名〕 **ホンドカヤネズミ**　〔学名〕 *Micromys minutus japonicus*

**【摘要】** 本州では福島県以南の太平洋側、石川県以南の日本海側及び四国、九州、隠岐、淡路島、対馬等に分布する。

**【形態の記載】** 体の背面は暗褐色で腹部は白色。頭胴長が5.2～7.1cmと極めて小さいが、その割には尾が長く、5.2～9.1cmである。特徴的な球巣を作る。

**【分布の概要】** 県内では、低地帯から低山帯にかけて分布するが、生息地は概して局地的である。チガヤをはじめススキ、オギ等の密生地に営巣するが、このような自然草地の減少に伴い生息数は減少している。

**【その他】** 長い尾をオギ、カヤ、ヨシ、ススキ等の植物の茎に巻き付けて登り降りし、それらの種子を食べる。低地帯では農地の圃場整備や河川敷のグラウンド化等により、生息地である草地環境が減少している。一方、台地・丘陵帯、低山帯では、草地環境が限定されている上にゴルフ場開発等が進み、生息地が減少している。

〔ネコ目　クマ科〕　**全県カテゴリー** 絶滅危惧Ⅱ類　**全国カテゴリー** 絶滅のおそれのある地域個体群

〔和名〕 **ニホンツキノワグマ**　〔学名〕 *Selenarctos thibetanus japonicus*

**【摘要】** 本州と四国、九州の一部に分布するが、九州はほぼ絶滅に近い。同一種はアジアに分布している。

**【形態の記載】** 体色は基本的に黒褐色。胸の白いＶ字斑は、若い個体ははっきりしているが、成獣では、斑が乱れるものもいる。

**【分布の概要】** 県内の低山帯から亜高山帯の森林に生息する。秩父市仙元尾根、秩父市（旧荒川村）熊倉山、秩父市（旧大滝村）白石山、小鹿野町（旧両神村白井差）、秩父市（旧大滝村）十文字峠等で記録がある。

**【その他】** 餌の豊富なブナ・ミズナラ自然林の減少が生息に影響を及ぼしていると考えられる。この影響もあり、低標高地に漂行する事例が見られる。

〔ネコ目　イヌ科〕　**全県カテゴリー** 地帯別危惧　**全国カテゴリー** －

〔和名〕 **ホンドタヌキ**　〔学名〕 *Nyctereutes procyonoides viverrinus*

**【摘要】** 本州、四国、九州に分布する。広葉樹林帯や下草の多いやぶ、湿地などに生息する。

**【形態の記載】** 背中は黄褐色で黒い刺毛があり、腹部も黄褐色。足と目の周囲は暗色をしている。アナグマとは体型や足の太さ等で区別できる。

**【分布の概要】** 県内では、低地帯から亜高山帯まで広く分布している。しかしながら、低地帯での安定的な生息地は限定されており、特に中川・加須低地ではかつて草加市の屋敷林等で生息記録があるが、現在では江戸川河川敷等に、その生息地は限定されつつある。

**【その他】** 低地帯における交通事故や捕獲記録が以前よりも増えているが、個体数の増加や生息地の拡大を示すものとは一概に言えない。

〔ネコ目　イヌ科〕　**全県カテゴリー** 地帯別危惧　**全国カテゴリー** －

〔和名〕 **ホンドキツネ**　〔学名〕 *Vulpes vulpes japonica*

**【摘要】** 本州、四国、九州に分布する。北海道には別亜種のキタキツネが分布する。

**【形態の記載】** とがった口先、三角形の大きな耳、太くて長い尾が特徴となる。キタキツネは、足の前面にある黒い部分が、４本とも明らかであることで本種と区別できる。

**【分布の概要】** 県内では低地帯から亜高山帯まで広く分布するが、現在の分布の中心は標高200m以上の低山帯から亜高山帯にかけてである。

**【生息状況】** 都市化の進展とともに低地帯での絶滅地域が広がっているが、近年においても部分的に生息あるいは繁殖確認されている所が見られる。羽生市の利根川、春日部市（旧庄和町）の江戸川、栗橋町狐塚、桶川市川田谷、上尾市原市、北本市石戸宿、戸田市等の荒川に近い地域で1990年以降に確認されているほか、所沢市北中、狭山市入曽などの広い平地林や最近ではさいたま市の見沼田圃等の県南部でも少数の記録が得られている。

**【生態的特性】** 人の近づかない斜面や起伏のある放棄地等に穴を掘って繁殖用の巣穴とする。

**【生息地の条件】** 台地・丘陵帯では、自然環境の豊かな谷地、荒川以西の低地帯では、広大な平地林、大宮台地及び中川・加須低地では、荒川や中川、江戸川の河川敷を中心に生息している。

**【生存に対する脅威】** 低地帯においては、河川敷の人工化や平地林の減少、台地・丘陵帯ではゴルフ場開発等によって、生息地が減少している。

**【特記事項】** 低地帯においては、河川敷の自然環境の連続性を確保することにより、生息数の供給を図れる可能性がある。

〔ネコ目　イヌ科〕　**全県カテゴリー** 絶滅　**全国カテゴリー** 絶滅

〔和名〕 **ニホンオオカミ**　〔学名〕 *Canis lupus hodophilax*

**【摘要】**19世紀までは東北地方から九州まで各地の山地に生息していたが、本州では1905年の奈良県での捕獲を最後に絶滅したとされる。

**【形態の記載】**頭胴長120～129cm程度。イヌの頭骨とは、吻部の凹度が小さいこと、裂肉歯が大きいことなどで区別できる。

**【分布の概要】**明治時代には秩父地方の山地に広く生息していたことが知られている。

**【生息状況】**絶滅種。秩父山地の秩父市（旧秩父市、大滝村）、小鹿野町等で頭骨等による生息記録が残されている。

**【生態的特性】**大陸に現存しているオオカミと同様、シカやカモシカ等の中・大型の哺乳類を集団で捕食していた最高次消費者であったと考えられる。

〔ネコ目　イタチ科〕　**全県カテゴリー** 地帯別危惧　**全国カテゴリー** －

〔和名〕 **ホンドテン**　〔学名〕 *Martes melampus melampus*

**【摘要】**本州、四国、九州に分布する。対馬には別亜種のツシマテン、北海道には別種のエゾクロテンが分布する。

**【形態の記載】**毛色が夏と冬で異なり、夏は褐色であるが、冬は黄色になるものと灰褐色のままのものがいる。平たい頭部、丸い耳、とがった口等がテン類の特徴である。

**【分布の概要】**県内では台地・丘陵帯から亜高山帯にかけて分布する。現在の分布の中心は、低山帯以上の森林地帯である。台地・丘陵帯では、高麗丘陵や加治丘陵、児玉丘陵の位置する飯能市、日高市、毛呂山町、嵐山町、本庄市（旧児玉町）等で確認記録があるが、少数が生息するにすぎないと考えられる。山地と接続していない独立丘陵である狭山丘陵では、本種の生息記録は全くない。

**【その他】**リス、ムササビ、ネズミ類や果実等を餌とし、樹上でも餌を探す。森林性で、餌の豊富な良好な自然環境が広域に現存していないと生息できない。

〔ネコ目　イタチ科〕　**全県カテゴリー** 地帯別危惧　**全国カテゴリー** －

〔和名〕 **ホンドイタチ**　〔学名〕 *Mustela itatsi itatsi*

**【摘要】**北海道、本州、九州、四国、沖縄に分布する日本固有種。

**【形態の記載】**頭胴長は♂27～37cm程度、♀は♂より明らかに小型で16～25cm程度。全身山吹色で、額中央部から鼻鏡部にかけて濃褐色の斑紋がある。チョウセンイタチ(*M. sibirica coreana*)は本種よりも大型で尾が長い。

**【分布の概要】**県内では低地帯から山地帯まで広範囲に生息しており、最も普遍的に見られる食肉類である。しかしながら、大宮台地及び中川・加須低地では、近年、生息確認例が減少している。

**【その他】**水辺を好み、近くに水田のある山沿いや、川の近くに生息し、小動物を捕食する。木の根元や崖の岩石の間の洞等を巣穴にする。河川改修や市街化の進行等により生息環境が悪化している。

〔ネコ目　イタチ科〕　**全県カテゴリー** 準絶滅危惧　**全国カテゴリー** 準絶滅危惧

〔和名〕 **ホンドオコジョ**　〔学名〕 *Mustela erminea nippon*

**【摘要】**本州中部の北アルプス、中央アルプス以北の山岳地に分布する。

**【形態の記載】**頭胴長は♂で約18cm、♀は♂より小型で、約16cm。夏毛は背面が濃い褐色で、腹面は白く、冬毛は全身白色となる。尾の先端は夏毛も冬毛も黒い。ニホンイイズナ(*M. nivalis namiyei*)よりも大型で、尾も太い。またイイズナの尾の先端には黒い部分がないことで区別できる。

**【分布の概要】**奥秩父の山地帯から亜高山帯に分布するが、生息地は概して局地的であり、少ない。山頂部のガレ場等に生息する。

**【その他】**肉食性で、主にネズミ、モグラ類、鳥類等の小動物や昆虫類を捕食する。

〔ネコ目　イタチ科〕　**全県カテゴリー**　地帯別危惧　**全国カテゴリー**　－

〔和名〕 **ニホンアナグマ**　〔学名〕 *Meles meles anakuma*

**【摘要】**本州、四国、九州の平野から山地の森林に広く分布する。

**【形態の記載】**頭胴長は♂で56～68cm程度、尾長12～17cm程度。♀は♂よりもやや小型。全体にくすんだ褐色で、四肢と胸部はやや濃い色をしている。両眼部は黒っぽい褐色、その間の鼻鏡部中央は白色。ずんぐりとした体つきで、耳介は短い。

**【分布の概要】**かつては低地から亜高山帯まで県内各地に生息していた記録があるが、低地帯では、現在、全く生息に関する情報はなく、絶滅したと考えられる。台地・丘陵帯では、山地に連なる加治丘陵や高麗丘陵等で減少の確認記録があるが、独立丘陵である狭山丘陵においては生息情報はない。

**【生態的特性】**森林や潅木林に集団で生息する。雑食性で主に土壌動物や小動物を捕食する。夜行性。巣穴は斜面や大岩、木の根元を利用して掘る。

**【生息地の条件】**巣穴適地と、主要な餌である土壌動物が豊富な良好な自然環境が必要である。

**【生存に対する脅威】**生息環境である森林の減少や農薬による餌の減少等のほか、捕食者である野良イヌの増加等。

**【特記事項】**地方によってはササグマ、マミ、ムジナ、ツチグマと呼ばれる。

〔ネコ目　イタチ科〕　**全県カテゴリー**　絶滅　**全国カテゴリー**　絶滅危惧ⅠA類

〔和名〕 **ニホンカワウソ**　〔学名〕 *Lutra lutra nippon*

**【摘要】**かつては北海道、本州、四国、九州までの河川の下流部に広く生息していた全長１mを超える大型のイタチ科動物。現在は高知県南西部に極めて少数の個体が生存している可能性があるのみである。

**【形態の記載】**頭胴長60～70cm、尾長40～60cm。背はややくすんだ褐色で、胸から腹側は白っぽい。四肢の指の間に水かきがあり、尾は太く円錐形をしていることなどから、他のイタチ科動物と区別できる。

**【生息状況】**県内では、かつて低地帯の水辺に広く生息していたと考えられるが、絶滅して久しい。江戸期における上尾市原市沼等での生息記録が残っている。また、農林省による狩猟統計では1923年、1924年、1927年に県内で捕獲記録がある。

**【生態的特性】**河川の中・下流部から沿岸部に生息し、河岸に巣穴を掘り繁殖する。魚類、甲殻類、ノネズミ、鳥類を捕食する、水辺生態系の最高次消費者。夜行性で、泊まり場として断崖の下の岩穴や茂みの中を利用する。

**【生息地の条件】**餌の豊富な水域と、営巣可能な河川環境。

**【生存に対する脅威】**戦前は毛皮目的の乱獲により個体数が減少したと考えられ、1928年以降狩猟対象から外されたが、その後の個体数減少原因としては、海岸の刺し網等による溺死や水質汚濁による河川餌動物の大幅な減少、海岸や河川の護岸工事による泊まり場や繁殖適地の減少等が考えられる。

〔ウシ目　ウシ科〕　**全県カテゴリー**　地帯別危惧　**全国カテゴリー**　絶滅のおそれのある地域個体群

〔和名〕 **ニホンカモシカ**　〔学名〕 *Capricornis crispus crispus*

**【摘要】**本州、四国、九州に分布する日本固有種。四国、九州の個体群は保護に留意すべき個体群とされている。

**【形態の記載】**全身白色または灰色、灰褐色の長い体毛に覆われる。四肢は太くて短く、♂♀ともに円錐型の黒い角を持つ。眼の下には眼下腺と呼ばれる大きな臭腺を持つ。

**【分布の概要】**山地帯～亜高山帯の森林地帯に生息するが、一部は外秩父や上武山地の低山帯でも見られる。

**【その他】**落葉広葉樹の葉や広葉草本をよく食べるが、冬期には常緑樹の葉、落葉樹の冬芽、ササ等を食べる。♂♀ともに一定の場所に定着し、一年を通じて同性他個体を排除する１個体ごとのなわばりを形成するため、生息密度は高くなり得ない。近年、山地帯から亜高山帯では一時の激減状態から脱し、生息数の増加傾向が見られるが、低山帯では森林伐採などによる生息地の分断や縮小により生息環境が悪化しつつある。